

横井也有（一）

伊藤浩睦

昼顔やどちらの露も間に合はず

これは、今回取り上げる横井也有（よこいやゆう）の代表句です。也有は、江戸時代の名古屋の俳人で、滑稽俳諧が廃れて真面目な蕉風俳諧が流行るなか、滑稽な句と俳文を独自にやり続けた人です。

客観写生とか人間探求とかいった、近代俳句の概念に慣れてしまっている今の俳人から見ると、理屈を述べているだけのものとして評価の対象外とされるものですが、この句の面白さが理解出来なければ、俳諧が持つ滑稽味は分からないといえます。

「朝顔には朝露が、夕顔には夜露が風情を添えているが、昼顔にはそのどちらもないので可哀相だ」としているのですが、どちらの露という表現に作者の機知が潜んでいます。

化物の正体見たり枯尾花

化物だと騒ぐが冷静になって見てみればこんなものだと言っています。枯尾花の季語が生きています。

この也有の句は、「幽霊の正体見たり枯尾花」と、化物が幽霊に替わって一般に広まっています。

おくり火の跡は此世の蚊やり哉

風雅から卑俗に転じる滑稽俳諧の見本のような句で、あの世へ先祖の魂を送る厳かな火と、蚊の害から身を守る蚊遣火とを上手く対比させています。

君よりは身のため寒し若菜売

「君がため春の野に出でて若菜摘む」という有名な歌のもじりで、君のためなどではなく自分の身のために寒い中で若菜を売っているとしています。権威となっている歌などをもじるのも、権威をひきずりおろす滑稽になっています。

蓬萊に見るや浮世の慾ぞろへ

この「蓬萊」は、正月の蓬萊飾りのことで、新年の季語になっています。白米に裏白、櫨、松竹梅、餅、干柿、穂俵、伊勢海老、熨斗鮑、勝栗、昆布などを飾りますが、自分が豊かになりたい、自分の子孫を繁栄させたい、といった願いを込めた縁起物なので、人間の欲望の勢ぞろいではないかと皮肉っているわけで、その皮肉が滑稽になります。

松尾芭蕉の句に「蓬萊に聞かばや伊勢の初便り」というのがありますが、取り澄まして風雅を言っている句と、慾ぞろへと蓬萊を皮肉っている也有の句と、どちらを好ましいと感じるかは読み手の感性の問題で、也有を好ましいと感じる人は素直ではないのですが、人間はその方が楽しいものです。

こんな句を作っている人なので、市井のひねくれ者かと思ってしまうそうですが、尾張徳川家で千石を取っていた横井時衡の子として生まれ、普請寄合、御用人、大番頭、寺社奉行といった要職を歴任して、五十三歳で隠居をするという有能な役人として人生を送った人でした。御用人は、殿様の側近くで仕えるので気の利いた人しか勤まらず、寺社奉行は格が高く上級役人の上がりの役職でしたから、この職に就くのは功績が大きかった証拠であるといえます。

隠居をすると、前津という名古屋城下の南の外れに隠居所を建て、八十二歳で亡くなるまで、俳諧や俳文に遊んでいます。現役の頃には有能な役人として働きつつ、人の生きざまを鋭く見ていた人ではなかったのかと思わせるものがあります。